ヨハネス・ブラームス（Johannes Brahms, 1833 年 5/7 – 1897 年 4/3）

19 世紀のドイツの作曲家であり、ピアニストとしても知られています。ロマン派の音楽家でありながら、古典的な形式と伝統を尊重し、その両者を融合させたスタイルが特徴です。ブラームスは、ベートーヴェンやバッハなどの先人たちの影響を受けつつも、自身の独自の音楽的声を確立しました。彼の作品は、深い感情表現、豊かな和声、そして緻密な対位法によって評価されています。

生涯と背景

- **幼少期と音楽教育**: ブラームスはハンブルクで生まれ、幼い頃からピアノの才能を示しました。父親は街の音楽家で、若いブラームスをさまざまな音楽の機会に送り出しました。ブラームスは作曲家エドゥアルト・マルクセンに師事し、厳格な音楽理論とクラシックの伝統を学びました。
- **ウィーンへの移住**: 1853 年にブラームスはヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムに紹介され、ヨアヒムの推薦で作曲家ロベルト・シューマンと出会いました。シューマンはブラームスの才能を「未来の巨人」と称賛し、その名を広めるのに大いに貢献しました。1860 年代にはウィーンに移り、そこでの音楽活動がブラームスのキャリアにおいて重要な意味を持ちました。
- **晩年**: ブラームスはウィーンで多くの作品を作曲し、広く演奏されるようになりました。彼はまた、指揮者やピアニストとしても活動し、晩年には名声を確立しました。1897 年に癌で亡くなるまで、ブラームスはウィーンで音楽の発展に寄与し続けました。

音楽の特徴とスタイル

- **クラシックとロマン派の融合**: ブラームスの音楽は、クラシックの形式とロマン派の情感を融合させたものです。彼はソナタ形式やフーガなどの伝統的な形式を用いながらも、和声的に豊かで感情的な表現を追求しました。
- **リズムとメロディ**: ブラームスの作品には、複雑なリズムやシンコペーションがしばしば登場します。メロディーは親しみやすく、しばしば民謡の要素が取り入れられて

います。これにより、ブラームスの音楽は深い感情と親しみやすさを兼ね備えています。

- **対位法**: バッハの影響を受け、ブラームスは対位法の技術に秀でていました。彼の作品には、緻密に組み立てられたポリフォニーがよく見られます。これは彼の交響曲や室内楽、ピアノ作品などで顕著です。

主要な作品

1. 交響曲:

ハネス・ブラームス(Johannes Brahms, 1833-1897)は、ロマン派の作曲家として、四つの交響曲を作曲しました。彼の交響曲は、ベートーヴェンの影響を受けつつも、独自のスタイルと感情の深さを持ち、クラシック音楽の重要なレパートリーの一つとなっています。以下に、ブラームスの四つの交響曲について詳しく説明します。

交響曲第1番 ハ短調 Op. 68

- **作曲年と初演**: 1862年に着手し、完成までに約14年の歳月を要し、1876年に完成。初演は同年の11月4日にドイツのカールスルーエで行われました。
- **構成**: 4楽章(序奏付きの第1楽章、緩徐楽章の第2楽章、スケルツォ風の第3楽章、壮大なフィナーレ)
- **特徴**:
  - ベートーヴェンの影響が強く、特に交響曲第9番との関連が指摘されることが多いです。ベートーヴェンの重圧を感じていたブラームスは、自分の交響曲を「ベートーヴェンの10番目の交響曲」と呼ばれることを恐れていたとされています。
  - 第4楽章のホルンソロとアルペンホルン風のメロディーが非常に有名で、晴れやかなC長調で終わります。

交響曲第2番 ニ長調 Op. 73

- **作曲年と初演**: 1877年に作曲され、同年12月30日にウィーンで初演されました。

- **構成:** 4 楽章（アレグロ・ノン・トロッポ、アダージョ・ノン・トロッポ、アレグレット・グラツィオーソ、アレグロ・コン・スピリト）
- **特徴:**
  - 「田園交響曲」とも呼ばれることがあり、牧歌的で穏やかな雰囲気が漂っています。第 1 番に比べて明るく、楽観的な印象を与える作品です。
  - 第 1 楽章の豊かなメロディーライン、第 2 楽章の美しい歌、そして第 4 楽章の開放的で活気に満ちたフィナーレが特徴です。

交響曲第 3 番 ヘ長調 Op. 90

- **作曲年と初演:** 1883 年に作曲され、同年 12 月 2 日にウィーンで初演されました。
- **構成:** 4 楽章（アレグロ・コン・ブリオ、アンダンテ、ポコ・アレグレット、アレグロ）
- **特徴:**
  - もっとも短い交響曲ですが、感情的には非常に豊かで、対比が際立つ作品です。第 1 楽章の有名な「F-A-F」主題（「Frei aber froh（自由だが幸福）」の頭文字を取ったもの）が中心に展開されます。
  - 第 3 楽章のポコ・アレグレットは、抒情的で繊細なメロディーが特に愛されています。

交響曲第 4 番 ホ短調 Op. 98

- **作曲年と初演:** 1884 年から 1885 年にかけて作曲され、1885 年 10 月 25 日にマイニンゲンで初演されました。
- **構成:** 4 楽章（アレグロ・ノン・トロッポ、アンダンテ・モデラート、アレグロ・ジョコーソ、アレグロ・エネルジーコ・エ・パッショナート）
- **特徴:**
  - ブラームスの最後の交響曲であり、最も深遠で悲劇的な作品です。終楽章はバロック音楽の形式であるパッサカリア（主題と変奏）を用いています。
  - 第 4 楽章の主題は、バッハのカンタータ第 150 番から借用したもので、24 の変奏とフーガが展開されます。この革新的な構造と深い感情表現が、ブラームスの交響曲の中でも特に高く評価されています。

ブラームスの交響曲の特徴

1. **形式と対位法の重視:** ブラームスは古典的な形式を重視し、緻密な対位法を駆使しています。彼の交響曲は、ベートーヴェンの伝統を継承しつつ、独自の様式を確立しています。
2. **主題の発展:** 各楽章において、ブラームスは主題を巧みに発展させ、変奏や対位法を通じて展開していきます。これにより、統一感のある作品が生まれています。
3. **感情の深さ:** ブラームスの交響曲は、しばしば内省的で深い感情を表現しています。彼の音楽には、喜びや悲しみ、憂鬱や希望といった複雑な感情が織り交ぜられています。
4. **管弦楽の扱い:** ブラームスは管弦楽の各パートをバランス良く扱い、豊かな響きを作り出しています。特に弦楽器の厚みのあるサウンドと木管楽器の巧みな使い方が特徴です。

ブラームスの交響曲は、彼の内面の深い感情と卓越した作曲技術が結びついたものであり、今日でも多くのオーケストラによって演奏され続けている不朽の名作です。

2. 室内楽:

ブラームスの室内楽作品は、クラシック音楽の中でも重要な位置を占めており、彼の独特な作曲スタイルと音楽的アイディアが反映されています。ブラームスの室内楽には、弦楽四重奏、ピアノ五重奏、クラリネット五重奏など、多様な編成の作品が含まれています。以下に、ブラームスの代表的な室内楽作品について詳しく紹介します。

1. ピアノ四重奏曲

- **ピアノ四重奏曲第 1 番 ト短調 Op. 25** (1861 年)
    - ブラームスの初期の室内楽作品の一つであり、4 楽章構成です。特にフィナーレの「ロンド・アッラ・ツィンガレーゼ(ハンガリー風ロンド)」は、ハン

ガリーの民族音楽の影響を受けた、活気あふれるエネルギッシュな楽章で有名です。

- **ピアノ四重奏曲第 2 番 イ長調 Op. 26** (1861 年)
  - 第 1 番に比べて、より抒情的で穏やかな性格を持っています。長大な第 1 楽章と、変奏曲形式の第 2 楽章が特徴です。終楽章は明るく、リズミカルな要素が強調されています。
- **ピアノ四重奏曲第 3 番 ハ短調 Op. 60** (1875 年)
  - 別名「ヴェルト・クライスラー・クヴァルテット(F-A-E クヴァルテット)」とも呼ばれるこの作品は、劇的で暗い性格を持っています。ブラームスの個人的な苦悩が反映されており、特に第 1 楽章は緊張感と重厚な響きが印象的です。

2. ピアノ五重奏曲

- **ピアノ五重奏曲 ヘ短調 Op. 34** (1864 年)
  - ブラームスの室内楽の中でも最も有名な作品の一つです。元々は弦楽五重奏曲として作曲されましたが、その後ピアノと弦楽四重奏の形に改編されました。この作品はブラームスの作曲技術の高さと、深い感情表現が融合した傑作であり、特に第 3 楽章のスケルツォは激しいリズムと強い対比が印象的です。

3. クラリネット五重奏曲

- **クラリネット五重奏曲 ロ短調 Op. 115** (1891 年)
  - 晩年のブラームスがクラリネット奏者リヒャルト・ミュールフェルトのために作曲した作品です。哀愁を帯びた美しい旋律が特徴で、クラリネットと弦楽四重奏の対話が繊細に描かれています。特に第 2 楽章のアダージョは、クラリネットの甘美なメロディーが印象的です。

4. ヴァイオリンソナタ

- **ヴァイオリンソナタ第 1 番 ト長調 Op. 78** (1878 年)

    - 「雨の歌」としても知られ、ブラームスが作曲した歌曲「雨の歌」の旋律が用いられています。全体にわたって詩的で穏やかな雰囲気が漂い、特に第 2 楽章は美しいメロディーが展開されます。
- **ヴァイオリンソナタ第 2 番 イ長調 Op. 100** (1886 年)
    - 「トゥーンのソナタ」とも呼ばれ、スイスのトゥーン湖のほとりで作曲されました。明るく、陽気な性格を持ち、第 1 楽章は軽やかでリズミカルなメロディーが特徴です。
- **ヴァイオリンソナタ第 3 番 ニ短調 Op. 108** (1888 年)
    - よりドラマティックで感情的な作品です。4 楽章から成り、第 1 楽章の激しい対比、第 3 楽章の抒情的なアダージョ、そして終楽章の力強いフィナーレが印象的です。

5. チェロソナタ

- **チェロソナタ第 1 番 ホ短調 Op. 38** (1865 年)
    - ブラームスの初期の室内楽作品であり、バッハの「フーガの技法」へのオマージュが込められています。チェロとピアノの対話が深く、特に第 1 楽章は緊張感とエネルギーに満ちています。
- **チェロソナタ第 2 番 ヘ長調 Op. 99** (1886 年)
    - より力強く、劇的な作品です。第 1 楽章は激しいリズムと力強いテーマが特徴であり、第 2 楽章のアダージョは感傷的で美しいメロディーが流れます。

6. 弦楽四重奏曲

- **弦楽四重奏曲第 1 番 ハ短調 Op. 51-1** (1873 年)
    - ブラームスの最初の弦楽四重奏曲であり、ブラームスが何度も推敲を重ねた結果完成した作品です。緊張感のある主題と精巧な対位法が印象的で、特に第 4 楽章は力強いフィナーレとなっています。
- **弦楽四重奏曲第 2 番 イ短調 Op. 51-2** (1873 年)
    - 第 1 番と対をなす作品であり、より抒情的で親しみやすいメロディーが特徴です。第 2 楽章のアンダンテ・モデラートは美しい旋律が流れる、穏やかな楽章です。

7. 弦楽六重奏曲

- **弦楽六重奏曲第 1 番 変ロ長調 Op. 18** (1860 年)
  - ブラームスの若き日の作品であり、温かみのある響きが特徴です。特に第 2 楽章の主題と変奏形式は、優雅で抒情的な音楽が展開されます。
- **弦楽六重奏曲第 2 番 ト長調 Op. 36** (1864 年)
  - 明るく、豊かな響きを持つ作品です。第 1 楽章は柔らかな旋律が印象的で、第 3 楽章のスケルツォはリズミカルで躍動感にあふれています。

8. その他の室内楽作品

- **クラリネット三重奏曲 イ短調 Op. 114** (1891 年)
  - 晩年の作品であり、クラリネット、チェロ、ピアノのための三重奏曲です。特に第 1 楽章は、クラリネットの哀愁に満ちた旋律と、チェロ、ピアノの対話が美しく融合しています。
- **ホルン三重奏曲 変ホ長調 Op. 40** (1865 年)
  - ホルン、ヴァイオリン、ピアノのための珍しい編成の作品です。ブラームスが敬愛した母の死をきっかけに作曲されたと言われており、感傷的で暖かみのある音楽が特徴です。

ブラームスの室内楽作品は、彼の作曲技術の高さと音楽的な深みを示すものであり、特に対位法の技術や緻密な構成、豊かな和声が特徴です。これらの作品は、現在でも多くの演奏家によって愛され、頻繁に演奏され続けています。

3. ピアノ音楽:

ブラームスはピアノの名手であり、彼のピアノ作品は技術的な挑戦と深い感情表現が特徴です。彼のピアノ音楽には、ソロピアノのための作品、ピアノと他の楽器のための室内楽作品、ピアノ協奏曲などがあります。以下に、ブラームスの代表的なピアノ曲について詳しく紹介します。

1. ピアノソナタ

- **ピアノソナタ第 1 番 ハ長調 Op. 1** (1853 年)
  - ブラームスの最初の重要なピアノ作品であり、彼の初期の作風が表れています。4 楽章構成で、力強いリズムと豊かな和声が特徴です。この作品では、既にブラームスの対位法の技術や情熱的な表現が見て取れます。
- **ピアノソナタ第 2 番 嬰ヘ短調 Op. 2** (1852 年)
  - このソナタはドラマティックで情熱的な性格を持っています。特に、第 2 楽章の「アンダンテ・コン・エスプレッシオーネ」は、ブラームスが愛した詩から着想を得た、非常に抒情的な楽章です。
- **ピアノソナタ第 3 番 ヘ短調 Op. 5** (1853 年)
  - ブラームスのピアノソナタの中で最も有名な作品であり、最も長いものです。5 楽章から成り、スケールの大きい構成と深い表現が特徴です。特に第 2 楽章「アンダンテ・エスプレッシーヴォ」は、恋愛をテーマにした詩に基づいており、ロマンティックな情感が豊かに描かれています。

2. ピアノ協奏曲

- **ピアノ協奏曲第 1 番 ニ短調 Op. 15** (1858 年)
  - ブラームスの若き日の作品でありながら、壮大なスケールと深い感情を持つ協奏曲です。交響曲的な要素が強く、オーケストラとピアノが対等に対話する形式を取っています。第 1 楽章の劇的な導入、第 2 楽章の美しいアダージョ、そしてフィナーレの激しいロンドが特徴的です。
- **ピアノ協奏曲第 2 番 変ロ長調 Op. 83** (1881 年)
  - ブラームスの成熟期に書かれたこの協奏曲は、4 楽章構成という独特な形式を持ち、非常に大規模です。特に第 3 楽章の抒情的なアンダンテは、チェロのソロで始まり、その後ピアノが優美に加わる形で進行します。ブラームスのピアノ協奏曲の中でも、特に評価が高い作品です。

3. 変奏曲

- **パガニーニの主題による変奏曲 Op. 35** (1863 年)

- 「パガニーニ変奏曲」としても知られ、非常に高度な技巧を要する作品です。ニコロ・パガニーニの 24 番目のカプリースをテーマにしたこの作品は、二部構成であり、各部に 14 の変奏が含まれています。ピアニストにとっては大きな挑戦であり、その技巧的な側面から「フィンガル・トレーニング」とも呼ばれます。

- **ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ 変ロ長調 Op. 24** (1861 年)
  - ヘンデルの主題に基づく 25 の変奏とフーガで構成されるこの作品は、ブラームスの対位法技術と創造性が集約された作品です。フーガは特に印象的で、作品全体を締めくくる壮大なフィナーレとなっています。

4. 間奏曲、ラプソディー、カプリッチョ

- **6 つの小品 Op. 118** (1893 年)
  - ブラームスの晩年の作品であり、内省的で深い感情が込められた 6 つのピアノ小品から成ります。特に第 2 曲の間奏曲(イ長調)は、静かな美しさと哀愁を湛えた名曲です。
- **4 つの小品 Op. 119** (1893 年)
  - Op. 118 と同様に晩年に作曲された 4 つの小品で、間奏曲とラプソディーで構成されています。特に第 1 曲の間奏曲(ロ短調)は、ブラームスの作品の中でも最も感傷的で美しいとされ、穏やかなメロディーが心に染み入ります。

5. ハンガリー舞曲

- **ハンガリー舞曲(ピアノ連弾版)** (1869 年)
  - ブラームスがハンガリーのジプシー音楽から着想を得て作曲した 21 曲の舞曲集です。特に第 5 番は非常に有名で、華やかでエネルギッシュなリズムが特徴です。これらの舞曲は元々ピアノ連弾のために書かれましたが、後にピアノソロ版やオーケストラ版にも編曲されました。

6. ワルツ集

- **ワルツ集 Op. 39** (1865 年)

- ピアノ連弾のために作曲された 16 曲のワルツから成り、ブラームスの軽やかで愛らしい一面が表れています。これらのワルツは短く、簡潔な形式ながらも、彼のメロディーセンスが光ります。また、ピアノソロ版も存在し、多くのピアニストによって演奏されています。

7. その他のピアノ作品

- スケルツォ Op. 4（1851 年）
  - ブラームスが 19 歳の時に書いた作品であり、彼の初期のスタイルが感じられます。ダイナミックでエネルギッシュな性格を持ち、若々しい勢いが特徴です。
- バラード Op. 10（1854 年）
  - 4 つのバラードで構成されるこの作品は、スコットランドの伝説や詩に影響を受けています。特に第 1 曲は、ヘロとレアンドロスの物語を描写し、抒情的でドラマティックな音楽が展開されます。

ブラームスのピアノ曲は、その技術的な挑戦に加えて、深い感情表現や詩的な美しさが特徴です。彼の音楽は、ピアニストにとって技術面だけでなく、感情的な深さや表現力をも求めるものとなっています。ブラームスのピアノ作品は、今でも多くのピアニストによって演奏され、愛されています。

4. 協奏曲:

ヨハネス・ブラームスの協奏曲は、その力強さと深い感情表現で広く評価されています。彼の協奏曲はピアノ協奏曲 2 曲、ヴァイオリン協奏曲 1 曲、ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 1 曲があり、これらはすべて 19 世紀の重要なレパートリーとして位置づけられています。

1. ピアノ協奏曲第 1 番 ニ短調 Op. 15

- **作曲年と初演:** 1854 年に着手し、1858 年に完成。1859 年 1 月 22 日にハノーファーでブラームス自身のピアノで初演されました。
- **構成:** 3 楽章構成
    1. **第 1 楽章:** マエストーソ(Maestoso) - 重厚で壮大な楽章で、ドラマチックなオーケストラの導入部が印象的です。複雑なリズムと和声が用いられ、ブラームスの強烈な感情が表現されています。
    2. **第 2 楽章:** アダージョ(Adagio) - 静かで内省的な楽章。美しい旋律が展開され、深い精神性と静寂が感じられます。この楽章は「祝福の歌」とも称され、優雅な美しさがあります。
    3. **第 3 楽章:** ロンド - アレグロ・ノン・トロッポ(Rondo - Allegro non troppo) - 力強くリズミカルなフィナーレ。活気あるテーマが特徴的で、全楽章を通しての感情の高まりを締めくくります。
- **特徴:** ブラームスの最初のピアノ協奏曲は、ロマン派の他の作品と比較しても特に壮大で、オーケストラの役割が非常に大きいのが特徴です。初演時にはその斬新さから聴衆に受け入れられにくかったが、後に評価が高まりました。

2. ピアノ協奏曲第 2 番 変ロ長調 Op. 83

- **作曲年と初演:** 1878 年から 1881 年にかけて作曲され、1881 年 11 月 9 日にブダペストで初演されました。
- **構成:** 4 楽章構成(一般的な協奏曲は 3 楽章であるのに対し、ブラームスは 4 楽章形式を採用しました)
    1. **第 1 楽章:** アレグロ・ノン・トロッポ(Allegro non troppo) - 序奏でホルンが美しいテーマを提示し、続いてピアノが入ります。華やかで技巧的なピアノパートが印象的です。
    2. **第 2 楽章:** アレグロ・アパッショナート(Allegro appassionato) - 力強く、対照的なスケルツォ風の楽章。劇的な情熱が感じられます。
    3. **第 3 楽章:** アンダンテ(Andante) - チェロのソロで始まる抒情的で静かな楽章。ピアノとチェロの対話が中心となり、非常に感情的で美しい音楽が展開されます。

4. **第 4 楽章:** アレグレット・グラツィオーソ（Allegretto grazioso） – 軽やかで明るいフィナーレ。ピアノとオーケストラが互いに戯れるような、親しみやすい雰囲気が特徴です。

- **特徴:** 第 2 番は第 1 番と対照的に、より親しみやすく軽やかな性格を持っていますが、それでもなお高度な技術と音楽的洞察が求められる作品です。特に第 3 楽章のチェロとピアノの対話は、この協奏曲の中でも最も愛される部分の一つです。

3. ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op. 77

- **作曲年と初演:** 1878 年に作曲され、同年の大晦日にライプツィヒでヨーゼフ・ヨアヒムの独奏で初演されました。
- **構成:** 3 楽章構成
  1. **第 1 楽章:** アレグロ・ノン・トロッポ（Allegro non troppo） – 力強い主題で始まり、カデンツァを含む壮大な展開があります。ヴァイオリンの技巧的なパッセージが多く、ヨアヒムがカデンツァを作曲しました。
  2. **第 2 楽章:** アダージョ（Adagio） – 牧歌的で穏やかな楽章。オーボエのソロで始まり、続いてヴァイオリンが美しいメロディーを奏でます。非常にリリカルで抒情的な性格を持っています。
  3. **第 3 楽章:** アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ（Allegro giocoso, ma non troppo vivace） – 興奮したリズムと民族的な舞曲の要素を取り入れた生き生きとしたフィナーレ。活気に満ちた楽章で、ヴァイオリンの高度な技術を必要とします。
- **特徴:** ブラームスの唯一のヴァイオリン協奏曲は、ヴァイオリンの巨匠ヨーゼフ・ヨアヒムに捧げられ、彼の技術的助言を受けて作曲されました。技術的に非常に難しい作品でありながら、豊かな音楽的表現が求められる、ヴァイオリンレパートリーの傑作の一つです。

4. ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 Op. 102

- **作曲年と初演:** 1887 年に作曲され、同年 10 月 18 日にケルンで初演されました。
- **構成:** 3 楽章構成

1. **第 1 楽章:** アレグロ（Allegro） – 力強くドラマチックな開始。ヴァイオリンとチェロが対話しながら進行し、オーケストラとの絶妙なバランスを保ちます。
2. **第 2 楽章:** アンダンテ（Andante） – 穏やかで抒情的な楽章。チェロが美しい主題を提示し、それをヴァイオリンが引き継ぎます。感動的で深い感情が表現されています。
3. **第 3 楽章:** ヴィヴァーチェ・ノン・トロッポ（Vivace non troppo） – 明るくリズミカルなフィナーレ。活気に満ちたテンポで進行し、最後は劇的に締めくくられます。

- **特徴:** ブラームスの二重協奏曲は、ヴァイオリンとチェロのソロが対等に扱われ、それぞれが高度な技術と表現力を必要とします。友人であったヨーゼフ・ヨアヒムとの友情の再確認として作曲された作品で、チェリストにはロベルト・ハウスマンが関与しました。この協奏曲はヴァイオリンとチェロの対話が美しく、オーケストラとソロ楽器の絶妙なバランスが特徴です。

まとめ

ブラームスの協奏曲は、その複雑な構造と深い感情表現で知られています。ピアノ協奏曲はオーケストラとの対話が巧みに描かれ、ヴァイオリン協奏曲は技巧的でありながらも豊かなメロディーが特徴です。二重協奏曲は、ヴァイオリンとチェロの絶妙な掛け合いが魅力で、ブラームスの技術と芸術性を示す代表的な作品群と言えるでしょう。これらの協奏曲は、クラシック音楽のコンサートで今日でも広く演奏され、愛され続けています。

ブラームスの遺産

ヨハネス・ブラームスは、ロマン派音楽の中でクラシックの伝統を守り続けた作曲家として、音楽史において非常に重要な存在です。彼の音楽は、形式の美しさと感情の深さを融合させ、後の世代の作曲家にも多大な影響を与えました。特に、交響曲や室内楽作品は、今でもコンサートホールで頻繁に演奏され続けています。ブラームスの作品は、深い人間性と芸術性を持ち合わせており、聴衆に深い感銘を与える力を持っています。